

特集面用その4「労働遺産認定」野麦峠まつりに参加して

## 一現地に行くことで労働遺産の意味を知り「労働とは？」との問いを深める機会に

関西支部幹事・小野山真由美

2026年5月24日 ワサビ沢には、当時の工女の衣装を身に着けた小学生や教員、そして「山一製糸」ののぼりを手にした男性や菅笠に背負子男性と当時の行列を再現する一行に続き、私たちは山道を登っていきました。野麦とはクマザサの花が麦に似ていることから言われるが如く、足元にはクマザサが茂っていました。山道は整備され、とても登りやすい。この峠を工女が登ったときは、すでに岡谷から相当な距離を歩き、疲労困憊の中、雨や雪などの寒さに耐え、ひたすら郷里を目指し一步一步進んでいったのだろう。

### 1. 私の郷里と養蚕

私は群馬県高崎市出身。富岡製糸に近い多野郡吉井町（現在高崎市）で祖母は養蚕農家をしていました。「あゝ野麦峠」を山本茂実氏が出版した1968年、そのころの群馬県は桑畑が広がり、養蚕は農家にとっての大きな収入源。群馬のかかあ天下と言われることも養蚕＝女性の経済力でした。養蚕のための小屋があり、そこで蚕を育て、繭になるときは別の二階に移していたように記憶しています。桑の葉を蚕が食む音、独特のにおい、白い蚕の冷たく滑らかな感触。そして父の勤めていた上信電鉄は富岡製糸の製品を高崎に運ぶ路線として開通しました。山本氏が当時の工女を訪ねたころ、すでに相当な高齢となり、最後のチャンスとも言えるときだったであろう。1980年代になると養蚕農家も桑畑も目にしなくなりました。

### 2. 旧開智学校とはかり博物館

5月23日少し早めに松本に到着し、向かったのが、「旧開智学校」。長野県は非常に教育水準の高い県です。建物の美しさを一目見たいという思いで足を向けました。明治9年に竣工したという擬洋風建築の校舎は、約7割を地域の人々が負担し建てたという。展示のなかで目をひいたのが校訓。男性は「愛正剛」、女性は「愛正柔」。親愛公正に続き、男性は剛毅、

女性は柔順。この学校の卒業生に木下尚江がいました。女工哀史が書かれた1925年は木下の活躍期にあたる。木下の活動は、廃娼や足尾鉍毒が有名です。木下の製糸業の工女への関心はいかに？

また、松本城から近くの土蔵づくりの「松本市はかり資料館」へ。建物に惹かれなんの予備知識もなくふらっと入りました。目をひいたのが蚕の雌雄を選別するはかり。メスのほうが重いそうです。これまでは雌雄の識別は熟練しかできなかつたことがはかりでできるようになったと。つまり、いい生糸をつくるには繭の段階でいい雌蚕を選び次世代につなげていたという。

### 3. 松本市歴史の里

市民の保存運動から始まった博物館には、旧裁判所庁舎や少年刑務所のほかに、工女の宿「宝来屋」、そして旧昭和興業製糸場があります。労ペンクラブではここが最初の訪問の地となり、ガイドさんの説明を受けることで今回の労働遺産認定への理解が深まる22工女の旅する姿、働く姿を想像することができました。そこに木下尚江の生家があったのも興味深い。

### 4. 労働遺産としての野麦峠

明治の時代、富国強兵殖産興業の中、男性は兵隊へ女性の賃金労働はまさに製糸業へ。この野麦峠を一つの象徴として44年前から始めた「野麦峠まつり」。高山側からの行列と長野県奈川からの行列が野麦峠で合流する。工女を偲び、歴史ある旧野麦街道を歩くことで次世代に継承しようという地域の活動に、「労働遺産」としての価値に焦点を当てた今回の労ペンクラブ。野麦峠のモデルとなった政井みねさんも高度な技術者だったことへの注目を喜んでくれるだろう。労働遺産の認定は、現地に行くことでその意味を知り、またこれからの「労働とは？」という問いを深める機会となりました。